

研究ノート

教師の成長に関する一考察

—奈良女子大学附属小学校の教師の姿に学ぶ—

創価大学教職大学院

若 井 幸 子

要 約

奈良女子大学附属小学校（以下奈良女付属小）の教育は、「奈良の学習法」として、日本の教育界に大きな学びの場を提供し続けている。その背景には、大正自由教育で活躍した木下竹次の『学習原論』¹に学び、「成長し続ける」教師の存在があるのではないかと考えた。

奈良女付属小の教師がなぜ成長し続けているのか。代表的な教師の実践を、昨年度に引き続き、さらに掘り下げ、木下竹次の教師論と比較、考察しながら「奈良女付属小を学ぶ」意義を考えた。

I はじめに

教職大学院の授業科目「国内教育課題実地研究」の一環として、奈良女付属小を研究校として提供していただき本年度で5年目となる。昨年度、「創大教育研究」第21号（p61～74）において、奈良女付属小の教育実践を「成長し続ける奈良女子大学附属小学校の教師達」と題して教師論としての角度から考察を開始した。

昨年度の考察では、牧口常三郎（1871～1944年）（以下牧口）著『創価教育学体系』²で述べられている医学と教育学との比較による教師論の先駆的思想、また、木下竹次（1872～1946年）（以下木下）の『学習原論』における教師論をもとに、奈良女付属小の教師達の実践を考察した時、児童中心主義の授業観や、『学習原論』を元にして子どもたちの「学び」を考える教師達の姿勢を確認することができた。

今年度も、大正期以来、木下の『学習原論』という指導法の原流に戻り、自己をふりかえる作業を継続していることが、奈良女付属小の教師達の成長し続ける要因であると考え、奈良女付属小の教育を推進している二人の教師、梶田萬理子先生（以下梶

キーワード：教師論，成長し続ける教師，徹する教師

田先生)、谷岡義高先生(以下谷岡先生)の実践を考察してみたところ、改めて、教師として振り返る原点を持つことが大切であること、奈良女付属小では、学び続ける教師によって「伸びていく」という『学習原論』の理念が、今に生き生きと受け継がれていることが分かってきた。大正期新教育運動の中で教育現場に児童中心主義が大いに興隆したのであるが、牧口と木下という、この同時代を生きた二人の教育理念と哲学が現在の創価大学教職大学院と奈良女付属小での学びの場で出会ったことに不思議さを感じることもあった。

Ⅱ 成長する教師とは

創価大学の創立者池田大作先生(以下創立者)は関西に創価女子学園を建設するにあたって着任した教師に対し「これから、草創の開拓の時代を迎えるだけに、新たな難問も数多くあるでしょう。辛いことや苦しいこと、大変なこともたくさんあるでしょう。しかし、すべてが挑戦です。自分の経験の範囲でものを考え、行動していたのでは、新しい創造はありません。それを惰性というんです。まず、自分の殻を打ち破って、新しい挑戦を開始してください。」と語りかけた。そして「一切は人で決まる。教師こそ生きた最大の教育環境である。」と。さらに「教師は、すべてを生徒のために捧げ尽くすという姿勢に立つことです。」³と語り教師のたゆみない成長を期待したのである。

木下は『学習原論』第6章「学習指導の教師」の中で、「教師は学習者に靈感を鼓吹する人であり、鼓舞奨励する人であり、忠告者であり、案内者でなくてはならぬ。また教師は、実にかれらの共学者であることを要する。実に教師と児童生徒とは人類永遠の進歩を築き上げる親密な同行者である。あいともに伸びていこうの態度を取る伴侶である。学習者は学習によって伸びる。教師は学習指導によって伸びる。教師がかくのごとき態度を取ることによってきわめて気楽に学習者の長所を賛歎しつつつねに若々しい精神で充実した生活をすることができる。ほんとうに教師は生徒や児童のために真に生きれるのである。教師はために教育に無限の味を感じ児童生徒に感謝することができる。どうしてかれらに恩を被せたりすることができよう。学習者もこれによって十分に成長発展することができる。」⁴と述べ、教師は人類永遠の進歩を築き上げる親密な同行者であり、常に成長を共にすることの出来るものが教師という存在である。従って、教師冥利に尽きる職業であると述べている。

そういう意味で「学ぶ」という作業を共にし、学び続け、現実に子どもとともに生きる教師像が浮かび上がる。今、この情報化の時代に生きる子どもたちにとって「学び」とはなにかと、「学び」の本質が議論されている学校、教育現場にあって、「ともに学ぶ」「ともに生きる」を大正期以来ぶれずに実践している姿が奈良女付属小の教育実践には見て取れるのである。それはとりもなおさず「学ぶ」ということの本質的

な理解があるということではないか。今、成長し続けている教師の事例として取り上げている梶田先生、谷岡先生の魅力はそこにあるのではないだろうかと改めて考えてみた。すなわち「学ぶ」ことの真の意義は、人類永遠の進歩を築き上げるために「学び続ける」教師と生徒の関係性の中にしか存在しないということではないだろうか。従って、真に「成長し続ける」教師は「学び続ける」存在であり続けることができる教師といえよう。

1. 木下竹次が考えた学習指導の教師

木下は、前述の教師像に続けて『学習原論』第6章「学習指導の教師」において、「教授」ではなく「学習」指導の教師という着眼点を持って、その資質、児童と教師の関係性について詳細に論じている。「児童生徒に発動的創作的の学習態度を養おうと思うたならば、まず自ら発動的創作的に学習する人とならねばならぬ。すでに自己学習をやめて学習指導に熱中することのできない教師はもはや良教師ということはできぬ。」⁵と述べ、さらに、太陽の本然的な働きを教師の模範の姿にたとえている。

すなわち、「太陽は諸惑星を率いてこれに恩恵を与える源泉である。彼は万物に恩恵を与えながら、自分がこれを与えるともいわず、また強いて恩恵を与えようともせず、自然の大法則に従って遺憾なく万物生育させる。かつてその間遺漏するところはない。彼はいまだかつて自分に似せて万物を形成したことはない。各万物をしてその生をとげさせる。ここに太陽の偉大がある。教師はこの意味で太陽を模範としてよろしい。教師はなるべく間接に児童生徒に指導力を加えるものであるが、ある意味からいうとなお教育の中心である。児童生徒は教師という太陽を廻る諸惑星である。あるいはかれらは太陽の恩恵に没する地球上の万物である。教師はまったく太陽のようにはなれないけれども大いに太陽を学んでよろしい。由来教師はあまりに自分の思うように、むしろ、自分に似せて児童生徒を育成しようとする。じつに間違っている。」⁶とある。木下は、意識的でなくても、自分の教え子を自分に似せて育てようとした教師、「恩恵を与えてあげる」といったような教師の狭量な傾向性を鋭く指摘し、教師は万物を平等に育てる太陽や地球のような存在であり、児童と共に日常の生活から学び、共に育つ共学者と考えたのである。「学習」という視点を持つならば、太陽や地球と例えている様に、教師は、「自ら伸びる」児童生徒の環境としての教師であるとの考えは納得できる。

今年度「国内教育課題実地研究」での奈良女付属小訪問も5回目となるが、いつも、どのような意見であろうと批判であろうと常に耳を傾け、自身の失敗についても率直に話し、院生の皆さん一人ひとりに温かいまなざしで語る教師の度量の深さに驚くことがたびたびあったが、それは、常に成長し続けようとする教師が存在し、その視点が「子どもたちの成長」「子どもたちの学習」をいかに進めるかに注がれているからであると気づいた。

その考え方を根底に置き、研究誌「学習研究」⁷創刊の辞に「学習即ち生活であり、生活直ちに学習となる。日常一切の生活、自律して学習する処、私共はここに立つ。他律的に没人間的に方便化せられた教師本位の教育から脱して、如何に学習すべきか、如何にして人たり人たらしめ得るか、そのよき指導こそ教師の使命である。」と述べ、基本的な学習者としての子どもと教師の関係を確立し、その上で「児童生徒の日常学習生活の研究、学習の基礎たる科学芸術の研究、学習の環境たる学校家庭社会の研究、すべて真の人たり人たらしむべき一切の研究、わが学習研究はここに生まれる。」⁸との「奈良の学習法」に至るのである。

2. 奈良女付属小の教師の気風

毎年の国内教育課題実地研究でお世話になった小幡肇先生がこの春、奈良女付属小を退任するにあたり、「学習研究」あとがきに次のような挨拶文を寄せている。「公立小学校時代は、すべてにおいて教師が準備し教師の段取りのもと、教師の思惑によって進める授業でした。そのような教師の持つ“権力”の壁を自分でいかに打ち壊すかといったことから当校での教師生活がスタートしました。そして、学級経営で悩み、そこから、『この問題を解決するのはこの子たちだ』と腹をくくりました。その結果として編み出したのが『気になる木のはっぱをふやそう』という『しごと』の学習でした。その後、そのシステムの固定化を考える私の思惑によって破たん症状が現れ始めました。つまり、教師は、子どもの側にある問題は容易に目を向け、改善を図ることができます。しかし、このような教師自身の側にある問題にはなかなか目を向けようとはしません。実際、私もそうでした。結果子どもの側から離れる学習となり、破たんしました。そこで、同僚やアクションリサーチ的に研究に関わっていただいた森脇健夫（三重大学）吉永紀子（福島大学）等の先生方の声のおかげで上記のような問題に目を向けることができ、改善を図っていくことができました。以上のような教師の持つ“権力”の壁や問題を自分でいかに気づき、改善していくかが、本校で教師生活・研究生活を行っていく上で重要なことであつたと、退職するにあたって改めて気づかされました。それに気づくことができるのが、本校の学校文化です。」⁹と。

教師が常に自身の壁を破り、成長を続けていることが如何大切か、教師の言葉でその必要性が説かれている一例と見る事が出来る。

3. 現在に生きる二人の教師の実践

① 徹すること

木下は、「私は教師の教育力を尊重するとともに児童生徒の学習力を尊重したい。私は人は本能を基礎として教師指導の下に漸次自律的学習を遂げて人らしく発展することが可能であることを子どもから教えられた。従って児童生徒の学習可能を否定するような議論には賛成の仕様もない。『伸びていく』は私どもの信条である」¹⁰と述べ、

その上で、教師の資質として最も大切なものを「徹底力」としている。「教師の具備すべき資格はたくさんあるがなかでも徹底力を具備することは教師としてもっとも大切な資格である。教師の大小はこれによって決定される。じつに学習に徹底していくのは児童生徒だが、これを助けて学習に徹底させるのは教師の任務である。」とし、「まず自ら徹底せよ」とのタイトルをつけ「徹底的に学習させようという教師はまず自ら学習に徹底しておらねばならぬ。…教師は十分に徹底した知識技術があるばかりでなく、大いに修養して大なる自己を建設し、純粹無私の愛をもって児童生徒を包容しこれと利害休戚を同じくし十分にかれらの生活を理解しまたそれに近い生活をする事ができてよくその心弦にふれることができなくてはならぬ。」¹¹と述べている。

昨年度の考察で、成長し続ける教師の代表として紹介した奈良女付属小の梶田先生は、2012年8月発行の研究誌「学習研究」『山路兵市に学ぶ』¹²の中で山路兵市（大正7年～昭和9年）まで国語教育・合科学習の実践を推進の苦闘の姿を通し、教師の成長の過程を次のように述べている。

「自分の至らなさを責め、職を辞そうとまで苦悶し、ついに半ば自棄の思いで宣言する。『皆さん、今日からは、今までとちがって、一人一人にお教えすることにします。教わりたいこと、たずねたいことがあったら、どしどしお出でなさい。』と。すると、その数十分後、子どもたちは今まで見たこともないような自発的な動きに変わったという。それからおよそ一ヶ月半、子どもの求めに応じて個別指導や一斉教授を進めたそうだが、これが後、『独自学習』『相互学習』と呼ばれるようになり、自律的学習法の成立に大いに寄与する貴重な実践となったのである。…中略…教師はだれでも、子どもを能動的に学習させるにはどうしたらよいか、という問題に直面する。私自身、これまで身につけてきた授業のスタイルや技術では間に合わず、これを崩さなければ子どもが生きる学習には程遠いということに気づかされてきただけに、山路のこの主張には共感するところが多い。自分を見つめる誠実さ、子どもと真っ直ぐに向き合う真摯な姿勢にも心を打たれる。地獄のような苦悶の末、自らを解き放って今を生きる子どものありのままを受け入れ、自ら伸びていく子どもの力に感じ入り、子どものために真の教育を見出していった山路の生き方。それを知るにつれ、教師はだれでも同じような道を辿って成長していくものなのかと、時を超え、私も大きなものに包まれて応援されているような気がした。」と。

また、昨年度の考察で、梶田先生が、国語「ごんぎつね」の授業展開の中で、自身の行き詰まりを子どもたちの発言によって自覚し、子どもたちの発言によって新たな自身の成長を得たことを紹介した。山路が苦悶しぬいて「奈良の学習法」、そして、「独自学習」「相互学習」を生みだしていった姿を梶田先生自身が引用しているのは、まさしく、子どもたちと共に生き、「共に伸びよう」とする姿勢が梶田先生自身の骨格になっているとう証左であると同時に、前稿で紹介したように自身の行き詰まりをどのように打開していくかという「自身の課題」に「徹して」向き合い続けてい

るのであり、「大いに修養して大なる自己を建設し、純粹無私の愛をもって児童生徒を包容しこれと利害休戚を同じくし十分にかれらの生活を理解しまたそれに近い生活をする事ができてよくその心絃にふれることができなくてはならぬ」という木下の心を汲み取っている学校運営者となっている。要するに、徹することによって「大なる自己を建設し」「十分にかれらの生活を理解し」てきた教師の姿であると捉えられるのである。

“成長し続ける教師”が苦悶しながら生みだしてきた課程が「奈良の学習法」であり、木下の言うところの「まず自ら徹底する」教師の姿があると捉えられるのではないだろうか。理念を口で述べることは簡単だが、授業の実践の中で自ら自覚することは至難であろう。

また、さらに続けて、梶田先生は「相互学習について、独自学習を存分にした後は、子どもと子どもが活発に向き合うのは当然のことだ、と山路は考えた。問う子が真剣であれば、応える子も真剣になり、それに関わる他の子も真剣になる、という様子を目の当たりにしたからであろう。実のある学習、本気を出させる学習、それへの動機は、教師のわずかな補助、誘導、勢いづけが催起させるものだという事ここからとらえられる。山路の主張の背景を知り、脈々と受け継がれてきた本校教育の源流に触れる思いがした。と同時に、この清い流れを膚で感じつつ、私たちもまた歩みを先へとすすめることができればと願わないではいられない。」¹³と結ばれている。

成長し続ける教師たちによって子どもたちの素晴らしい成長の姿が発見された実感が示されている。あえて言えば、「成長し続ける教師」のみが子どもたちの真の成長の姿に気づくとも言えるのではないか。「ともに伸びていく」教師に徹した奈良女付属小の教師と子どもたちによって、築かれた奈良の学習法の姿を彷彿とさせる言である。徹することの大切さを自覚し実践している教師の姿は奈良女付属小だけではなく、他の学校でも見られることであろう。

しかし、木下の「学習原論」という指導理念に立ち返り「徹すること」の大切さを自覚し、木下が示したその指導理念までも更新する教師の力、「徹し続けている」先に自己改革、自己更新があることを示す教師の「学び」が大事なのである。そのことに気づかせてくれる奈良女付属小の実践であり、徹することの重さを実感させる教師の姿がそこにある。この「徹する」姿勢は、梶田先生だけでなく他の教師にも見て取ることができる。実際に奈良女付属小の教師の気風として表れているのである。

② 「まほろば」にみる教師の姿

実地研究でお世話になっている谷岡先生が発行された学年だより「まほろば」、理科だより「まほろば科学館」¹⁴を手にし一気に読ませていただいた。「成長し続ける教師とは」との問いに答える、誠に読み応えのある内容だった。

「まほろば」を読み進んでいくと、実に教師の資質として最も大切なものを「徹底力」としている意味がよく分かるのである。成長し続ける教師とは、自身の理念も学

習指導の実践もよく徹しているのである。子どもを見取るための努力、自らを深め磨く努力、自らの研鑽をし続けている教師の姿が浮かび上がってきた。

「まほろば」No. 47号（平成12年4月24日）を開くと、こんな内容が記されていた。

「日和佐先生は、夜の8時から12時が自分の仕事タイムです。私は電車の中や図書館で、仕事や読書をします。私は家が遠いので、日和佐先生のように毎日で4時間は出来ませんが、2時間ぐらひはします。そして、春休みも日曜日も、殆ど一日中コンピュータに向かって仕事をしていることが多いのです。しかし、なかなか思うように仕上がっていきません。いったいそんなに何をしているのでしょうか。それは、子ども達の学習の記録をいかに書き残すか、いかに表現するかを、苦心しているのです。教育を表現する仕事、目の前のこの子達の学びを書き留める仕事は、とても時間がかかるのです。しかし、私たちの教育実践は、この毎日の積み上げから始まると思っています。」

子どもたち一人ひとりの日記を毎日読み、それにコメントを入れる作業でも2時間はかかるとお話されていたことが印象に残っているが、それほど「日記」を大切にしている理由はなぜだろう。

「日記を考える」と題し平成11年9月20日付けの「まほろば」では人類学者・考古学者である鳥居龍蔵の残した日記や手紙などの記録に感動したことを通し、「鳥居龍蔵のように、自分の目を見たことをきちんと書き記していくと、どれだけ素晴らしいのでしょうか。我が校の子ども達は、毎日、日記を書いています。これは日々の発見や学びや考え方を書き表す、龍蔵のフィールドノートに匹敵すると考えていいでしょう。手元に、『國文学』（1996年2月号）があります。日記を特集していて、有名な作家、文学者の日記が紹介されています。これらを見ると、作家にとっての日記は、文学作品を制作していく上での発想ノートに当たるのかもしれませんが。また、古典の『和泉式部日記』『更級日記』『土佐日記』などのように、日記自体が文学作品として成立している場合も紹介されていました。日記は、生活記録、発想記録を超えた、文学作品にもなるのです。あの北野たけしは、常にノートを持ち歩き、ノートにメモが一冊分書けたときに、映画作りが始まると言うことを読んだことがあります。古今の天才達も、日々の発想、発見、思いを書きためて自己表現につないでいるのです。1年生の夏休みの日記を読んでいると、ぞくぞくする（鳥肌が立つ）ようなすごい日記を書く人が何人かいました。」とあった。教師から見ると日記指導は「一人一人を知り、子どもたちの一日一日に価値を与え、さらに自分自身を子どもたちの目を通してともに伸びる」ことであると思う。そして、「日記」の意義を子どもたちから見ると「自分自身を知り、自分の学びの場を広げる」ことになるのである。徹しているのは「日記指導」だけではない。

「学習環境・生活環境」と題した「まほろば」（平成14年4月15日号）を見てみると、そこには子どもたちが学び始めるための学習環境・生活環境についての記述が

あった。「司馬遼太郎は、500種類の辞書辞典を直ぐに使える本棚に整備していたそうです。たかが私でも50冊以上は、身近に置いています。創造的な力を組織させるには、この辞書・参考書がとても大切な学習環境なのです。…さらに、子どもが自ら学び始めるには、生活環境が大切です。私達は、学校の環境を良くするためにもいろいろ工夫を始めようと考えています。例えば、花壇の整備には、これまでかなり時間と労力をかけてきました。種から何度も植え替えをしながらパンジー、デイズ、ノースポールを育て、春には700株の花が咲きました。子ども達も、その育てている姿を見てきています。美しい学校には、素敵な子どもが育つのは当たり前です。かつて、ある学級で『直ぐにお花が枯れるので、造花の花にしましょうか』と言った方がいたそうです。これでは教育も造花になってしまいます。教室の花が枯れないとき、子どもも枯れないのです。私達は、出張でいろんな学校へ行くのですが、学校に一步入っただけで、玄関を見ただけで、校長先生と5分話ただけで、その学校の研究状態、子どもの状況が分かります。どこから指導したらいいのか、ここでは何を話しをしてあげるといいのか感じ取れます。環境がいいか、子どもの姿を語っているか、掲示物がいいか、掃除が行き届いているか、来客者を大切にするかなどがポイントです。人と環境を大切にする所に、いい教育があります。学習環境・生活環境を整えて初めて、子どもが少しだけいい方向に成長します。」と。子どもたちにとって成長に結びつく事柄、環境も含めてあらゆることに「徹した」学びの姿が見て取れる。

従って、そのような日々の積み重ねを知らずに奈良女附属小の学習を理解するのは難しい。

ある授業参観でのこと。10人ぐらいの子どもたちが黒板の所で、どのように黒板を書いていくといいのかを、真剣に5分ぐらいもめていたそうである。とてもおもしろいもめあいで、これからの学習の基礎となる場面だったそうである。ところが参観の先生方の半分は何をしているのか理解ができず、教室を出て行ってしまったそうである。

奈良女附属小の担任の意図をくみ取れず出て行った先生方に対し、谷岡先生は「学習は、そのクラス子ども達が今、何を、どのように学んでいるのかが大切なのです。教えるテクニックを見に来ている先生には、この場面の良さは分からないのです。私たちは間違いから学習が始まることを、大切にしています。学級は間違いところですよ。間違いを教室でどんどんして、世の中に出てから同じような間違いをしないようにトレーニングをしているのです。どんどん間違っ、その問題点をみんなで考えて、問題を乗り越える力をつけていくのです。教室は、みんなが間違いところなので、誰も笑いません。学習は、話し合いや討論によって学びを作っていくことです。学習行動は、動ける子どもから動き始めます。黒板の書き方、意見の言い方、本の読み方など、どのようにしたらいいのかの、意見の持てる子どもから行動を始めたらいのです。互いに声を掛け合って、互いに育て合うのです。先生一人の指導より、互い

の声の掛け合いは、より多くの子どもにやる気を起こさせます。そのような、全員が動き出す学習環境を、私たちは作りだそうとしています。動けない子どもを叱るのではなく、動ける子どもから動き出す学習、これが大切なのです。それでは、子ども自身が動く教室では、教師の役割はいったいどこにあるのでしょうか。一つには、子どもの力を集め、交流させるデザイナーとしての役割があります。もう一つは教師自身が、子どもの学びの対象なのです。子ども達は常に、教師がどのように物事に対するかという、『教師の感性』を見ています。これは大変なことですが、事実なのです。私たち（親も含めて）大人は、学ばれる対象とし、感性を磨いているのでしょうか。」(No. 56 平成12年6月26日)との問いを投げかけている。

子どもたちの生活する学校環境も含めて、教師こそ最大の教育環境であるといことの意味を言い得ている。子どもたちが活躍する場面、子どもたち感性の素晴らしさを理解出来るのは、教師が「学びとは何か」を理解していることが第一条件である。そして、日々、教師が感性を磨く努力を惜しまないこと、教師自身が学び続けることが大切である。いわゆる、木下が主張するように、教師に「徹底力」があること、教師に「ともに伸びていく」という姿勢、そして、心があることが大切なのである。

谷岡先生が、「まほろば科学館」(2008年2月4日 No. 110)に「思い続けること」と題して次のように綴っている。「願いは叶う。学業も、研究も、子育ても、趣味も、言い続けること、思い続けることが大切です。願いに向けて大きく行動を起こす時は、瞬間を捉える呼吸というものがあると思いますが、先ずは、思い続けることです。ずっと、ずっと思い続けて、小さな発信を日々続けていると、その瞬間が、意外なところからやってきます。教育は、そんな願いの積み重ねが大切で、ある日突然、形になって見えてくるものだと思います。子どもに願いを託し、子どもを信じて、言い続けて、願い続けて、見守り続けることです。願い続けていると、見えないことが、見えてくるものです。小さな兆し、小さなきっかけを逃がさなくなります。関係がないと思っていたところに、深い意味があったり、大切にしなければいけない真実があったりします。教育は、相手を思いやる気持ちが大切です。一緒に活動するときは、自分がしたいことが10個あれば、そのうち2個か3個の大切なことは教師がさせてもらって、あとの7、8個は子どもにしてもらうことが大切です。授業計画や活動計画をたくさん教師が考えてあっても、子どものしたいことを十分にさせるといい感じに取り組みが進みます。教師のしたいことは、2割、多くて3割でいいのです。世界のイチローでも、そのあたりで頑張っていて、後は、運の世界なのです。では、最初から10割達成できないのがわかっているのに、2から3割が達成するための努力でいいのでしょうか。それは違っているのは分かります。10割達成する目標を持って、あらゆる努力をして、環境を創り、過酷なトレーニングや準備を、自分（教師や親自身）に課します。そして、教師や親がしなかった教育が2、3割達成できたことを喜び、あとの8割は、子どもが頑張ったことを喜びます。子どものよさを見出し、子ど

もを褒めることに精一杯の気を使うことです。自分の中だけで喜ぶのではなくて、周りに感謝し続けることだと思います。」と。谷岡先生が自分の言葉で表現した「徹する」教師の姿が表現されていた。

Ⅲ 奈良女子大付属小で学ぶ意義を考える

木下は「徹すること」を教師の重要な資質としたが、上述の学習指導の教師に続けて、さらに「愛は力だ」「若年の教師にも愛の力は宿る」「愛の表現」「教師の修養」「修学の教師」「修学の体験」「修学の四条件」「各種の学問」「技術の教師」「健身の教師」「理財の教師」「指導の教師」と、細部にわたり教師の資質と教師の実態に即した事例を通し、教師はどうあらねばならないかを示している¹⁵。

自然界で普遍的な存在である太陽を例に、人間の生活に欠くことの出来ない存在であるばかりでなく、子どもたちにとっても身近で感じられる実感を伴った大きな存在が教師であるとした木下の意図を考えると、子どもたちを取り巻く様々な課題や、時代がどのように変化しようと、その課題を乗り越える象徴として大きな存在を指し示したかったのではないだろうかと考えた。

「太陽は教師の模範」といい、「徹底力」といい、創価教育の創始者牧口が願った教師、「人生に於ける最高級の複雑至難なる性質の仕事であって、最大の熟練を積みなければ完全にその任務を果たせない」職業である¹⁶との教師像と重なってくるのである。

「子どもたちの成長」に視点を持った児童中心主義であればあるほどその根幹には、子どもたちに本然的な自由を確保し、生活に根ざした学習課題を設定し、自律的な学習を促すことの出来る感性の優れた最高級の教師の存在が不可欠であるということであろう。それが「太陽の教師」との言葉となって表現されたのであろうか。

奈良女付属小で、児童中心の「学び」、学習がどのようになされているのか、その最大の環境としての「教師」は学習にどのように関わっているのかを追求していくと、牧口が目指した最高級の仕事が、木下の教育理念と哲学が実践されている奈良女付属小の教師達によって実験証明されていると思えてくるのである。「学びを深める道」を生き生きと示唆してくれている「成長し続ける教師」こそ児童中心主義の一番の要の存在であるとは、牧口、木下両者の共通認識であったのではないかと考えた。

すなわち、児童中心主義の実践をしている教師を「集団」または「個人」として「「成長し続ける教師」としての視点からとらえることは、「奈良の学習法」また、「独自学習・相互学習・独自学習」が、どのように生みだされたのか、どのような価値を孕んでいるのかということを知る過程となり、「奈良女付属小」の教育を学ぶ意義となると思う。

梶田先生にしても、谷岡先生にしても、木下が提示した「学習原論」に固執するの

ではなく、「学習原論」を現代に展開し、それを乗り越える理論構築をなし続けている。成長し続けようとする教師であると思う。その姿を発見することが何よりも全国各地から足を運んで学ぼうとする教師の一番の関心事なのかもしれない。そして、それこそが奈良女付属小を今、私たちが学ぶ意義と捉えることが出来ないだろうか。

子どもたちの成長を見つめ、教師としての在り方を日々思索し続けて獲得された「ともに伸びる」奈良女付属小の教育実践は、教師こそ最大の教育環境であると考えた牧口や木下の理念を証明していく足がかりともなり、教育現場で当面する諸課題を乗り越えるヒントも「成長し続ける教師の力」の中にあるのではないかと改めて考えている。

教師論の一考察として、昨年度の考察に加え、

今回の拙稿に、最大の教育環境としての教師は

- ・自分はどう変わらなければならないのかという壁にぶつかり、苦悩の道を進む。
- ・日記指導や自由研究など経験に裏打ちされた児童理解が背景にあり、教師の知恵が発揮された授業がある。
- ・「術の熟練と之が理解説明の学とを統合渾一」¹⁷と牧口が述べているが、教育技術の熟練だけではなく学問的にも人格的にも一流に成長しようとの姿勢が見られる、と追加したい。

奈良女付属小は、「当校の『奈良の学習法』と称せられる教育は、いわゆる教科主義に立つものではない。前期学習法の時代は、生活主義による『合科学習』が特徴的であった。そして、戦後の後期学習法においては、子どもの生活実態や興味関心の拡充、発展の方向等を手がかりにして立てられた『しごと』『けいこ』『なかよし』の3本柱による内容で構想され、実践が行われてきた。戦後から現在に至るまでの教育計画は、当校独自の考え方で立てられたものであることから、指導にあたる当校の教員が共通に拠る所とするべき道標を作成することにした。戦後の新教育開始の頃、その当時の同人は、“奈良版”『学習指導要領』を作るという意気込みであたったと聞いている。そこで立てた教育計画が、『奈良プラン』と呼ばれ、現在もその精神や形態が維持されてきている。」¹⁸と世に問い続け、更新を続けている。刊行物は、この他に上述の研究誌「学習研究」があり「学習研究」は、今回発行で458号（平成24年8月15日発行）となり、現在も全国の教育研究の牽引力となっている。そして、毎号その柱となる「学習研究」の主題は、木下の「学習原論」によっているのである。

佐藤学氏（以下佐藤）は著書『学校を改革する』の中で「授業と学びはいずれも、卓越性を追求することなしには、実りある成果を生み出すことは出来ない。ここで言う卓越性は、他の人と比較して優れるという意味ではない。どんな条件にあっても、その条件に応じてベストを尽くすという卓越性である。授業の実践も学びの実践もたえず最高のものを追求しなければ、まっとうな授業や学びを実現させることはできない。子どもの能力が低いからと言って学びのレベルを下げたり、家庭環境が厳しいか

らと言って学びのレベルを下げてはならない。教師の条件も同様である。自分の体調が悪いからとか多忙だからと言って、授業のレベルを下げてはならない。子どもにも同様のことを要求する必要がある。どんな条件であっても、丁寧さと細やかさを大切にして、最高の学びを追求することを習慣にする必要がある。『教育とは習慣の形成である』というデューイの指摘は、卓越性の哲学によって支えられる必要がある。一般に、教師たちの授業における課題のレベルは低すぎる。これまで一万を超える授業を観察してきたが、課題のレベルが高すぎて失敗した授業はほとんど見たことがない。ほとんどの授業の失敗は課題のレベルが低すぎることによって生じている。課題のレベルを上げて卓越性の哲学を追究することは、教師にも子どもにも、学びにとってもっとも重要な倫理である謙虚さ（modesty）を育てることにもなる。」¹⁹と述べている。奈良女付属小の教師の実践、児童が授業の進行をし、専門家も驚くような自由研究を発表し、同級生のおたずねに1時間の授業を使って一人で答え続けるという、児童中心主義の「独自学習・相互学習・即時学習」の学びの姿は、今、学校を改革する最先端の現場で考えられている「卓越性の哲学」と重なって見えてくる。それは、その実践の内容が時代を超えて、いかに優れているかという証左にもなるのではないか。

佐藤のいう「卓越性」とは、奈良女付属小の教師の実践で言えば、他の追随を許さない「学び」の追求に「徹している」教師が存在することであると考える。そして、「学びのすじ道」の継続的な更新がなされている奈良女付属小の教育は、「成長し続けている」教師の日常の実践に支えられているのである。

今回、教師論その2として「奈良で学ぶ意義」について教師論を木下の教師論、特に「徹する教師」を視点にしながら考えをまとめた。勿論、まだまだたくさんの学ぶ意義があろう。創価大学教職大学院で学ぶ一人ひとりが大きな課題を持ち、真摯に学び、率直な研究成果を世に示し、成長していくことが、課題研究の現場を研究材料として提供してくださっている奈良女付属小の先生方はじめすべての皆様に感謝することになるのではないだろうか。

参考・引用文献

- 1 木下竹次『学習原論』1923年 目黒書店
- 2 牧口常三郎『創価教育学体系』牧口常三郎全集 第三文明社 1983年
- 3 池田大作『新・人間革命第17巻』希望の章 2007年11月18日 p179
- 4 木下竹次『学習原論』第6章学習指導の教師 世界教育学選集 明治図書 1972年 p162
- 5 同上 p168～p169
- 6 同上 p169～p170

- 7 「学習研究」1922年（大正11年・4月1日創刊）
- 8 同上 創刊の辞
- 9 「学習研究」2012年6月 第457号 p71
- 10 木下竹次『学習原論』世界教育学選集 明治図書 1972年 p14
- 11 同上 p170～p171
- 12 「学習研究」2012年8月 第458号（平成24年8月15日発行） p56
- 13 「学習研究」2012年8月 第458号（平成24年8月15日発行） p56
- 14 学年だより「まほろば」我が校の「学習法」を親に伝えた六年間の記録（1999年4月9日～2005年3月10日）
理科だより「まほろば科学館」2008年3月18日発行（1998年～2001年1月30日「まほろば科学館だより」）
- 15 木下竹次『学習原論』世界教育学選集 明治図書 1972年 p171～p179
- 16 牧口常三郎 牧口常三郎全集第6巻『創価教育学体系』下 p324～p325 第三文明社 1983年
- 17 同上 p446
- 18 新訂・「奈良の学習法」『確かな学習力を育てるすじ道』明治図書 2008年4月 p10
- 19 佐藤学『学校を改革する』学びの共同体の構想と実践（岩波ブックレット842） 2002年 岩波書店 p19～p20